

「県民と県議会との意見交換会」 二戸市会場の概要

〔日 時〕 令和7年4月21日（月）12：55～14：59

〔場 所〕 二戸地区合同庁舎 大会議室

〔テーマ〕 「文化や伝統産業を通じた地域振興について」

〔参加者〕 （6名）

下嶽 智美（小久慈焼 窯元）

堀内 晋介（一般社団法人二戸市観光ツーリズム協会 職員）

笹山 英幸（鶴鳥神楽保存会 神楽衆）

榎本 伸悦（有限会社高倉工芸 箒職人）

中村 明央（一戸町教育委員会世界遺産課 課長補佐）

柴田 恵（すず竹細工職人）

〔出席議員〕（9名）

高橋こうすけ議員（座長）、五日市王議員、佐藤ケイ子議員、畠山茂議員、

鈴木あきこ議員、松本雄士議員、佐々木朋和議員、佐々木努議員、木村幸弘議員

〔オブザーバー議員〕（1名）

田中辰也議員

◆ 参加者自己紹介及び現在の活動状況等について

○下嶽さん

小久慈焼は江戸時代から始まり、今、父の代で7代目になる。

私が家に戻ってから30年ぐらい経っており、今は私がメインでやらせてもらっている。

主な活動は、小久慈焼の製造と販売になる。作っているものの7～8割は県外に出すが、市内で買ってくださる方も多く、年がら年中作っては出し、作っては出しというところである。

もう一つの活動として、陶芸体験会を開催している。市内の幼稚園、保育園、小中学校、高校と、18歳までのうちに一度は小久慈焼に触れてほしいとの思いで活動している。

○堀内さん

金田一温泉の観光案内所で、温泉にいらした方の観光案内を主に行っている。

そのほかの活動としては、国指定史跡の九戸城をいろいろな方に知ってもらおう活動をしている。史跡というのはどうしても敷居が高く感じてしまうが、気兼ねなく訪れてもらいたいので、九戸城を活用したイベントを開催するなどして、一つの国指定史跡としても、地元町内会としても盛り上げるべく活動している。

○笹山さん

配付資料に掲載されている私の活動地域、所属等に普代村と書いてあるが、土日や平日の深夜に家業の漁業を手伝うために釜石市に戻り、片道100kmの通勤をしている。

鶴鳥神楽は、先月で国の重要無形民俗文化財に指定されて10周年を迎え、10周年記念公演には達増知事にもお越しいただき、盛況に終了したところ。

6月の大阪万博出演が決まり、万博に2日間出演した後も、西宮神社での公演等様々決まってきた。

鶴鳥神楽には5歳で出会い、興味があつてずっと追っかけをしており、縁あつて現在に至る。

○榎本さん

九戸村の高倉工芸で南部箒を作っており、働き始めて6年目になる。

高倉工芸では種まきから栽培、収穫、製造販売、全て自分たちの手作り、手作業でやっている。

だからこそ、ほこりがよく取れるほうきを作ることができると思っている。

岩手県で栽培すると、毛先がちぢれ、コシがよく出る。これはほかのところではなかなかできないので、やはりこの辺のやませという気候が影響しているのではないかと考えられている。

特にこの和洋服ほうきはスーツのほこり取りや、セーターの手入れでも毛玉ができにくくなるので、重宝している。

もう一つの特徴は、一生使用できること。30年以上使用している人がいることを考えるとコストパフォーマンスは良く、長く見ていただければ、元は取れる商品になっている。

私自身は農業も手伝っており、ほうきの製造もしている。

ほかには、月1回全国の有名百貨店で実演販売やワークショップをやらせていただいている。ワークショップはすぐ予約が埋まる状況。

今日は県北地域振興について皆さんとお話できるのが本当に楽しみでやってきた。

○中村さん

御所野遺跡は平成元年に国の指定遺跡になり、その後、国及び県から御支援いただき、令和3年7月に世界遺産になっている。

世界遺産になった直後は来訪者が増えたが、その後、減少してきている。

令和6年度に、管理運営をスムーズに行いたいことから町の直営に戻し、おかげさまで去年は約3万人の来訪者があり、ほぼ横ばいだが前年比で微増となった。

今後、観光のほうにも力を入れ、地域の活性化につなげていきたい。

○柴田さん

ふだんの活動は、プロとしてやっていきたいと移住してきた数名の方に竹細工を教え、そのほかは家で自身の製作と、半々ぐらいのバランスでやっている。

すず竹は、120年に一度花が咲いて枯れてしまうが、まさにそれが今、6～7年前から、そういう状態になっており、これから続けていけるのかとても心配しているところである。

◆ 意見交換（文化や伝統産業を通じた地域振興について）

○畠山茂議員

伝統産業に取り組んでいる方に伺いたい。伝統や歴史文化を次の人、次代に引き継ぐことを念頭にお仕事をなさっていると思うが、採算性も考慮しないと事業が成り立たないこととなるため、ふだん仕事をしている中で、社会や行政に手伝ってほしいことがあれば伺いたい。

〔回答：榎本さん〕

農業と製造と販売をやっていると自己紹介でお話ししたが、農業は農薬を使わずに育てているため、種まき後は、雑草がたくさん生えてくる。そのため、1か月間は手作業で1本1本、1日中ずっとしゃがんで雑草を取っている。その後、8月から9月は収穫期だがこちらも1か月程度、1本1本収穫する作業をしている。約半年ぐらいは農業をやっていることになる。

その後の製造では、担当制でいろいろあるが、僕は今一番小さい和洋小箒をメインに作っている。月1回程度、全国の百貨店に行って実演販売をしたり、ワークショップでは実際に教えてあげるといったことをしている。

一番の課題は人材育成、後任の育成と考えている。

地域おこし協力隊の方に来ていただいて今年で4～5年目になり、今現在は、3名の地域おこし協力隊の方に研修していただいている。

行政に手伝ってほしいことは、地域おこし協力隊が来ている期間中は支援があるが、協力隊を卒業した後の移住定住に向けての住居の問題の解消である。住もうと思っても、この地域はアパートが少なく、金額も結構高いので、これから事業や生活を始めようとしても、この地域で住居を個人で見つけるのは難しい。そのあたりは行政、事業者と市町村の人たちが三位一体でサポートする必要があると思っている。

〔回答：下嶽さん〕

小久慈焼は江戸時代の1,800年から始まっているので、約200年久慈地域で続いてきたことになる。地元の粘土である久慈粘土を使っているが、粘土も取れなくなってきた。

正確には、あるけれども、取れない。例えば道路があるとか、家が建っているとかそういった様々な要因がある。今はぎりぎりだが何とか考えながら作っているところである。今は原材料がインターネットで手に入る時代で、作り方にしても手作業より機械を使ったほうが、製品的に均一になるという考え方もあるし、その辺をどこまで作り手が考えるのかというところがあると思う。

あとは、身に染みて感じることだが、やはり地元の人が地元のものを評価することはなかなか少なく、出荷先がほとんど首都圏や関西地方が多いので、そういったところを地元とどう折り合いを付けていくかというのが難しいと思っている。

〔回答：柴田さん〕

鳥越竹細工は、1,200年続く伝統工芸ということにはなっているが、縄文時代から続いているという話もあり、私もそうではないかと思っている。

しかし、原材料の竹は9割以上が死んでしまっている。昔、鳥越という地域は、ほとんどの山ですず竹が生えていたが、今はもう、全てまっ茶色。発芽はしているが、ほとんど立ち枯れしてしまって、専門家の方がおっしゃるには、再生には20年から30年ほどかかるということだった。

鳥越の竹細工は、地元で跡を継ぎたいという人がほぼいない。興味があつて東京都など関東地方から来る人はいても、地元にも誰もやりたいという人がいないのはすごく寂しいことなのだが、やはり続けていくには、材料がないといけない。

これまで担い手不足を心配してきたが、まずは材料の竹がないことが深刻である。

1,200年以上続く伝統をどうやってつなげていけばいいかという心配がすごくある。

〔回答：中村さん〕

先ほど柴田さんから、竹細工は1,200年前からとされているが、もっと昔からではないか、という話があったが、縄文土器の底に、よく竹細工を編んだものの跡がついているので、竹細工は縄文時代からあったということが、御所野遺跡の発掘の成果から分かっている。縄文時代から四、五千年続いてきたというのが分かり、当博物館でもこの伝統を途絶えさせないようにしなければいけないと考え、柴田さんに来てもらって講座を開催するなど、鳥越の竹細工に関心を持ってもらう取り組みをやっているところである。

参考までに、持参したこのサルナシのかごは、昔作っていただいたサルナシのかごなのだが、面岸の箕を作る方から、箕を作っても売れないという話を聞き、御所野縄文博物館でかごを作って売って見たらどうかと提案し、販売しているもの。伝統工芸を守るための事業も教育委員会でやっているところである。

○鈴木あきこ議員

この人口減少の中で特に担い手の人数が多いと思われる神楽や、皆さんの後継者についての課題についてお話を伺いたい。

また、先ほど柴田さんから、材料のすず竹は120年経つと花が咲いて枯れてしまうという話があったが、それが何千年も続いてきた理由や、材料が取れなかった期間にどのような対策をされてこられたのか伺いたい。

〔回答：柴田さん〕

私が個人的に思うのは、この規模で竹が死滅することはなかったのではないかと。昔は、あそこの山が死んでいたけれども、こっちは生きていたというような話を聞いた。

すず竹というのは、北海道から九州の太平洋側には大体あつて、ただし太い竹の育つ地域は限られている。私たちが使う竹は、箸ぐらいの細い竹で、ほぼ笹のようなもの。

昔は見渡す限りほとんどが、すず竹の山だった。

昔と何が違うかということ温暖化の影響と整理してしまうが、やはり、気候が明らかに違う。

人口も少なく、作り手も地元にはいないこともあると思うが、竹が死滅する規模が違うことが一番の要因ではないかと思う。

〔回答：榎本さん〕

後継者の課題に関して、地域おこし協力隊の人に来てもらって、農業部門も販売も、製造も全てやってもらっているが、協力隊の卒業後に残りたくても残れなかった方も結構いて、やはり一番は住居の問題という方がいる。高倉工芸以外の人も含めて九戸村に来ている方なのだが、そういった状況があったので先ほど住居のお話をさせていただいた。

地元の人がなかなか目を向けてくれなくて、僕たちも今までインターンシップや地元の小中学校でも教えていたが、過去一度も就職してくれた人はいないという状況で、やはり地元、特に二戸地域から興味を持って伝統工芸に取り組んでくれる人がいれば、非常に嬉しいと思う。

ほうきのみならず、全ての伝統工芸に関して言えることだが、二戸地域の小中学校、高校の子供たちに対して、こういった伝統工芸があることを知ってもらう機会があればいいと思う。

〔回答：笹山さん〕

先ほど神楽は後継者が多いというお話をされたが、ちょうど10年前に国の指定を受けたときは、自分が見てきた5歳からの25年間で一番少ない時期で、メンバーが5人だった。その5人で、30分、1時間のイベントであれば問題ないのだが、鶴鳥神楽は1月から3月までの間、巡行で毎週土日3時間から4時間程度の神楽を3か月間続けるので、それが大変だった。数年間頑張っていたところで、国の指定をいただいて、ますます辞めることができなくなった。

若い人がこちらを向いてくれないとすれば、魅力を伝えられていないなど、大変そうにしているこちら側の責任だと思う。

鶴鳥神楽が大変そうだということで、責任感で入ってくれた役所の後輩がいて、いつとき誰彼構わず入れる時期があったが、技術や意欲が伴わずに辞めていった。指導しているこちらも、家族との時間を割いて、時間をささげて教えているのに辞められていくと、すごく面白くなくて、そこからは一人一人をきちんと見るようにした。

あとは、やはりそれなりの評価を受けるためには、それなりの技術が伴っているべきだと思うので、辞められてもいいというくらいの気持ちで、とにかく厳しく教えることにした。巡行をしていると、中には2年に1回の巡行を待っている目の肥えたお客さんがたくさんいる。そういう人たちの評価は素直で、すごく拍手があるときもあれば、拍手がない時は全くない。「誰々の何が見たい」と、演目と人を指定してくる人もいる。指名されるような人になりたいと思って自分も頑張っている。

鶴鳥神楽を始めたての人には、デビューのときはよくやったと褒める。2回目以降はとにかく否定する。そこがだめ、あそこがだめと言うことをひたすら続けて、アメとムチのムチをひたすら入れて、たまに褒めると、喜びにもつながるだろうし、お客さんの評価も伴ってくる。その間に辞めるくらいなら辞めて構わないと思っている。

最近、昔、神楽に触れてどうしても忘れられなかったという人が、4月から久慈地域に就職して入ってくれた。自分も鶴鳥神楽が釜石市に巡行に来ていたところを幼少期に見て、インパクトを受けたのが、神楽が全てになった瞬間だった。そのときのメンバーを見れば、人数も多いし、53演目ある中で、好きなだけ神楽をやっていた。8演目～10演目やった後にお客さんがこれを見たいと言ったら、その場で配役して30分くらいパッとやってしまう、すごくカッコいい人たちだった。当時のメンバーに憧れて、最近はどうぞん演目を復刻させるようにしている。分身ができるなら35演目ぐらいできるが、分身できないので、今のメンバーでできる演目は20演目くらいになる。それでも、年2演目くらい増やすようにしている。実際、1年半程前の大槌町での巡行で、憧れてくれた中学生が、今大槌町から通っている。

やはり魅力があれば、後継者はついてくるというのが無形民族文化だと思う。有形と無形の違い

はあっても、人材が一番の資源だと思っている。ただ、意欲がある人を動かすために、意欲がなく足を引っ張る人を切り捨てる覚悟でやっている。このやり方が正解かどうかは、20年後くらいに分かると思う。

○鈴木あきこ議員

子供の頃に関わるところが一番大事だと思っている。私も教育委員会に地元の伝統芸能や工芸に関わる時間をぜひ作ってほしいということをお願いしているが、今の子供たちは忙しいということで、実現しておらず、引き続き頑張って取り組んでまいりたい。

○佐々木努議員

私の地元にも神楽があるが、残念ながらどんどん高齢化し出生数も減って、人材不足で非常に困っている。何かアドバイスがあれば伺いたい。

また、観光振興の観点から、コロナ禍が過ぎて、団体旅行から個人旅行に変わったり、あるいはインバウンドがあったりする中で、県北地域の観光の課題認識と、これからの集客や地域活性化に関してどう考えているか伺いたい。

〔回答：笹山さん〕

私が小さいとき、虎舞を自分の小学校でやっていたように、地域ごとに様々な芸能があって、学校の総合的な学習の時間等でやっていると思うが、言葉を選ばないで言うと悪しき風習だと思っている。

普代村に来るまで神楽の追っかけをして、半纏を着せてもらって、神楽をやらせてもらってとても嬉しかったことを強く覚えているが、いざ普代村に来てみたら、強制でやらされている子供たちが嫌な顔をしていて、一番だめだと思った。神楽イコールこの演目というように、大体子供ができる演目は決まっている。神楽イコールこの演目、ほかの演目は知らない、嫌なものだ、強制される、何年生になったらやらなきゃいけないという最悪なレッテルが張られる状態で、子供たちと接することになる。

どうやって触れさせるかという、やはり見せることだと思う。鶴鳥神楽はこういうものを知ってもらうには、やってもらうのではなく、まず見てもらうこと。

実際に震災後から子ども神楽宿という活動が始まり、授業の中で学校が宿主という形をとっていただき、実際に巡行する。本来はその後にお酒を飲み、特別な詩を詠うが、学校なのでコーヒー牛乳でやる。

神楽の流れを知っていただき、その中で子供向けに面白いだろうという舞をチョイスしている。いかに子供たちに神楽は楽しいものだと思ってもらえる機会を与えることができるかが一番大事なのではないかと思う。

その中でやりたいという子供がいたら、やらせたらいい。

最近は親がやらせたいというケースが多いが、期待しているようなものではないですよと親までセットで指導する。例えば、子供と同じテーブルについてイベント先でいただいたお弁当を食べようとする親がいるが、「お子さんは預かっていますが、線引きはちゃんとしてください」と言うと厳しい世界だと認識して、手を引いてくれる。神楽をやらない人まで面倒を見る余裕はないし、やはりその線引きでプロ意識というのはちゃんと持たなければいけない。何歳であろうが神楽衆で、伝統をつないでいく人間だと認識させるために厳しくしている。

〔回答：堀内さん〕

金田一地域しか見ていないので正確なところは難しいが、コロナ禍前と比較した来訪者について、人口減も加味してトータルで見ると減っている印象だ。その中で海外からのお客さんの比率は少し上がっている印象がある。意外と金田一には海外の方がいらしている。

行き先となると、二戸市に来る海外の方は必ず隣町の軽米町に来る。ハイキュー!!というバレーボールのアニメ漫画の聖地巡礼が最近の傾向になっている。

今後について、二戸地域は、九戸城、いわゆる国の史跡があるとか、漆の一大産地である。ホンモノがある地域だと思う。ホンモノにできれば小さいうちから触れる機会を提供してあげたいというところで、最近、特に中学生などの修学旅行生の受入れを増やしながら、地域に人が来るようなことをやっていけたらいいと考えている。

【回答：中村さん】

旅行に関して、県内の修学旅行はコロナ禍のときは県内旅行がすごく多かったのだが、現在はがくと減って少なくなった。

逆に県内から首都圏などへ行く方々が増えているというところだが、令和6年度に前年比で微増となった要因は、県の御協力でイベントを一つ二つ開催できたことが大きいと考えている。来ていただきさえすれば受けは良く、環境も良いし、案内も良いというアンケート結果があるので、ひとまず来てもらう取り組みをやっていけたらと考えている。

あとは、小中学生に御所野遺跡や自分たちのまちの魅力をPRしてもらう「PR大使」を任命する取り組みをしており、御所野遺跡に興味を持ってもらうきっかけ作りに寄与できているのかなと思う。神楽と一緒に、自分のまちが好きになる子を育てていくというのが近道かと思う。

ほかに、7万5000平米ほど国の指定面積があるが、周りの山も7万5000平米ほどあり、全て町の単費で買上げて環境保全をしている例は全国的にもないので、大切にしたいと考えている。

○佐々木朋和議員

笹山さんの話を聞いて、子供たちや若い人たちが地域に残るということは生きがい作りだと思った。神楽があるからこの地域に残るのだと、そういったことで地域振興というのは十分あり得るのだと実感した。移住政策では仕事に目を向けがちだったが、こういった目線もあることを学ばせていただいた。

柴田さんは、一関市の京屋染物店の縁日にも出品されている。京屋染物店も、染物屋だけでもジーンズを作るなど、現代に合わせていろいろやっていらっしゃることもあり、もの作りをされている方皆さんに伺うが、現代の生活様式に合わせてこんなものを作っていこうという考えがあれば教えていただきたい。

榎本さんは、もの作りと一緒に農業もやっていらっしゃるという話をされていたが、一関地域にも東山和紙があり、紙すきをしたいという若者が原料の楮の栽培に挑戦をして、楮の農業で挫折している。分業的にやったらどうなるのかという意見もあるが、そういった点について職人としてどのように感じているか伺いたい。

また、以前、県南広域振興局で県予算を使って五感市というのをやっていた。これは、消費者が直接企業を訪れ、五感で体感することにより製品への理解や企業のファンになってもらう取り組みなのだが、大人のキッズニアのようにオープンにして、観光客に物を作ってもらってその良さを知ってもらい、実際に買っていただくということをやっていた。その時は、コロナ禍もあり続かなかったが、先ほどのお話だと海外のお客さんも多く来ているということだった。私は「youは何しに日本へ」という番組が好きだが、「youは何しに県北へ」ではないが、海外のお客さんに特化して、そこで作るなどの体験をしてもらい感動してもらうようなモニターツアーのようなものについてどのように考えるか。

【回答：柴田さん】

伝統・形は残しつつ、今までよりもサイズを小さくしている。逆にお客さんのほうからこういうものがあつたらいいなというオーダーがあり、優先的に作っているところ。

鳥越の場合は80代後半とか90代の人何人かしかいない中で、作るものがその人によって決まっているので、細かい要望に対応することは高齢の人は無理で、逆に若い人は手間がかかる。

こういうのが欲しいと言われたときに対応できる技術を持った若い人がなかなかいないことが大変不安。

小さい製品の例としては、家庭の中で使うザルなど。今まではザルのサイズが結構大きかったが、

形は残しつつ、小さくしている。昔より台所があまり広くないので、丸型のものを楕円型にするとか、あまり場所をとらないように作っている。

〔回答：下嶽さん〕

うちの店に来てくださる方は数えるほどで、あとはほとんど県外のお客さん。店に来てくださるお客さんは日帰りの久慈エリアの方が多く、そういう方たちに年に何回か足を運んでもらうために、季節ごとに作るものを変えてアナウンスしながら、リピートしてもらえるようにしている。

県外に出すものは基本的に、これが小久慈焼のようなオーソドックスなものを出している。ゴールデンウィークのような長期の休みのときには、お客さんたちが満足してもらいたいようなものを増やす形で、ものの作り分けをしている。例えば3月は異動シーズンなので、記念品やプレゼント向けに、これも小久慈焼というものを出していくし、逆に久慈地域の人が東京都の人などに贈り物をするときには、これが小久慈焼というようなものを選んでくださる。

〔回答：根本さん〕

まず農業部門に関しては、高倉工芸では自分たちが作るほうきのためだけに栽培している。ホウキモロコシという材料なのだが、それを手作業で作っている。個人としては、雑穀農家もやっており、例えば、タカキビという雑穀だが、これは実も美味しいが、穂先はほうきになるし、種の殻は染料になる。タカキビを育てて、実は地元の雑穀屋に売り、ほうきの材料として穂先を高倉工芸に売るといふ仕事もしている。

分業という、最近高倉工芸で力を入れているのは、オール岩手で作ろうという商品。例えば独自の漆染めで作っている製品がある。木炭の炭染めで、この地域での分業をさせてもらっていて、やはり大きな今後の方向性として、分業はいいと思う。

それでもやはり一度はいろいろ学んでほしい部分もあるので、これは農業部門も製造部門もそうだが、個人的には、一旦は何年間か来てもらっていろいろ修行して、それからそれぞれのライフスタイルに合わせて運用していくという方向性もあると思う。

〔回答：堀内さん〕

先ほどお話があった五感市のホームページを見つけて、正直、これは楽しそうだった。通年で体験ができる施設が多いようだが、それぞれ海外の方も入っている施設もあるという印象。

以前、二戸市内にある滴生舎という漆の製造から販売までをやっている会社に海外のお客さんの受入れをお願いしたことがある。海外の方のモニターツアーの受入れを頼まれて、滴生舎にお願ひに行き、こういう話があるが、どうですかと言ったときに、当時、相手方からは「ただ漆を紹介するだけにはしたくない」と言われた。よく話を聞いたら、なぜ、漆が二戸市でこれだけ取れるのか、なぜこれだけいいものがあるのか、そういった背景をきちんと知ってもらった上で、受入れをするならいいというお話があって、いろいろやり取りをしたことを思い出した。五感市に関してもそういったところが多少あるのではないかというイメージを持った。海外の方はおそらくこういった、ザ・日本というようなものが大好きだと思うので参考にしたい。

○佐々木朋和議員

こちらの予想とは違った答えも返ってきて、非常に勉強になった。

先ほどの五感市も、もの作りの皆さんからの自発的なところであったということで、やはり理解をいただくのは大変難しいところだと思う。

今、堀内さんがおっしゃったように、できたものだけではなくてその背景にあるものを知っていただくということでやはり作る工程から、なぜこういう値段がついているのかというところが伝わり、旅行にきた方にまた買っていただける機会があればいいと思った。

○佐藤ケイ子議員

いい工芸品を作っても、地元の人が知らないという問題はある。

県としても地元のいいものを身近に感じてもらう施策は必要だと気づかされた。

地元では売れないというのは高価だということもあると思うが、それでも首都圏等では、引き合いがあるということなので、これは本当にPRしたい。

例えば工芸品を販売するにあたって、インターネット販売の状況や、ふるさと納税での活用状況などについて伺いたい。

それから民俗芸能について、子供のときから体験させることが大事だと思ってきたが、強制と感じられると、子供たちにとってはマイナスになるという話があり、うっと思った。

私の地元では鬼剣舞を子供たちがすごくやりたがって、幼稚園や保育園から、さらには北上翔南高等学校では鬼剣舞部があり、全国大会を目指して一生懸命やったり、鬼剣舞をやりたいので、地元就職したいということもあり、この民族芸能の地域に対する貢献というのはすごいと思っていた。また、遠野市の附馬牛町にも神楽がたくさんあるそうだが、地域おこし協力隊に来た人がこの神楽をやるためにここに残るのだと。生業は、別な副業をやりつつというので、ほかから来た人たちがこの民俗芸能を盛り上げているというのが遠野市の例だという話を聞いたことがあり、本当に民族芸能も伝承の仕方があるのだと思っていた。

笹山さんの教え方で、アメとムチという、すごくいいことをお話されていると思い、これをもっと広めてもらいたい。

巡行も大変だと思うが、ぜひ県南地域にも来てほしい。先日も宮古市の黒森神楽が来て大好評だった。ぜひ県南地域にも巡行していただきたいがどうか。

〔回答：笹山さん〕

本来巡行は自分たちからお願いして伺うものだが、現在にはそぐわないので最近だと矢巾町に呼ばれて巡行をやらせていただいた。呼んでいただければいつでも伺う。

上司が、「やる機会がないと成長しない」というので、今年は年18回、水曜日にほぼ毎週外国人のツアー向けに必ず普代村に寄って、神楽をやることを予定している。

県北地域唯一の国指定の無形民俗芸能なので、二戸市観光ツーリズム協会にも呼んでいただけたら嬉しい。こちらは成長できる良い機会と捉えているので、北上市でもそうだし、後輩たちもいろんな場所でできると刺激を受けるので、よろしくをお願いしたい。

〔回答：柴田さん〕

販売方法について、個人としてインターネット上では販売はしておらず、年に1回ギャラリーを開催する程度である。

同じ人が作っても同じものはなく、写真で見て購入した後に、手に取って、写真を見て注文されたときのイメージと合うかが不安で、実際見ていただいて、買っていただくことにしている。

〔回答：榎本さん〕

ふるさと納税とインターネット販売は積極的にしており、結構引き合いも多い。特にコロナ禍のときは販売会に行けなかったのでインターネット販売は助かった。今後もぜひ続けていきたい。

特に今後は海外展開を意識しており、当社の社長は今月台湾に3週間くらい行っていた。

私自身は高倉工芸の親戚筋にあたり、高校のときにもお手伝いで作ったり、畑仕事もさせてもらったりしたが、非常に厳しくて、当時は二度とやるものかと思ったが、縁あって50歳でUターンをして、現社長のお父様が引退するときに社長から手伝ってくれないかと声をかけてもらった。逡巡したが、人もいなくてこのままでは南部箒もなくなるかもしれないと思い、やることにした。

そういった意味では職人の仕事なので、甘くはできないし、そこは難しいが、やった事があるという経験は最初のステップとしては低くなったように感じるため、それ以上の何か価値観のようなものを持った人が来てくれると嬉しいと思う。

そのため、教育課程でどう伝えるかということは非常に大切だと思う。でも、知らないと選択肢にもならないので、いろいろ知ってもらう機会はやはり必要だと思う。

〔回答：下嶽さん〕

通販等についてはやっていない。取引先がやってくれていて、逆にうちが入ると喧嘩になるので、あくまでも取引先メインでやってもらう形をとっている。そのため、そこからつながって海外への販路もいくつかある。

私は18歳で久慈市から一度外に出ている。その後岩手県の物産と観光展のようなイベントに参加して、外から岩手県を見て、そこで初めて岩手県にはこんなものがあるのだと気づいた。やはり地元にいると地元のことがなかなか見えないところがある。1回外に行ってみると岩手県ってこんなに広いんだとか、盛岡市にはこんなものがあるのかなど改めて感じるの、地元の人が地元を知らないというのはある意味仕方ないのかと思う。それを少しでも体験という形を通して、久慈市にはこんなものがあるということを経験してもらいながら、種まきをする意味で、体験教室などをやっている。

○松本雄士議員

皆様方の取り組みが唯一無二で、それが今後の地域振興の強みであり、ポイントになってくるのではないかと思います。

先ほどホンモノという言葉があったが、そういった、ものやことがあるということをまず知ってもらう情報発信が大切だと思う。

それぞれ皆さんすごくいいものがあることを連携して波及させて、地域振興、観光振興で人を呼び込むというところで、堀内さんと中村さんにお伺いしたい。そのいいものをつなげていくにあたって、協議会や団体との連携状況や、それに対する活性化、場作りに対しての行政への期待や要望などあれば教えてほしい。

〔回答：堀内さん〕

行政や協議会等との連携というところだと、私どもはイベントの実行委員会の事務局をやっているが、二戸地域振興センターから、イベント開催のための負担金をいただくなどの協力を得ながら、やっている。特にそれに不満があるわけでもなくて、むしろ、あまりたくさん予算をつけてくれるなという思いがある。実際にイベントをやっていると、いわゆる補助金などをつけていただくが、額が大きくなると重たくて、正直プレッシャーを感じる。できればそんなにたくさんはいらない。必要最低限あれば何とかする。あまり背伸びをしてまではやりたくない。イベントというのは大きくなればなるほど、いろいろなところで取り上げていただいたりするが、それは、打ち上げ花火と一緒に、上げたら終わってしまう。

それよりも、規模は小さくなくてもいいから、細く長くやっていく方が個人的にはいいと思っているところ。今の県からの御協力は十分すぎるくらいで、要望はないのが現状である。

〔回答：中村さん〕

御所野遺跡については、県から県北地方の重要な観光資源であると認識してもらい、県の観光協会にも連携していただいている。例えば岩手県公式観光サイト「いわての旅」で、旅行先として提案していただいたり、また岩手県が令和7年9月から11月まで、J R東日本の重点共創エリアとされていることから、オール岩手で御所野遺跡を広告していただいております、県の取り組みに関しては、私も不満はない。

ほかの組織との連携ということで、鵜鳥神楽が県北地域で唯一の国指定無形民俗芸能団体だということを考えてみると、県南地域には国指定の郷土芸能があつて、それぞれの地域で盛り上げているが、市町村には郷土芸能の専門家がいなので、いざ指定しようとしたときに、できないでいるところがあると思う。指定するときに県や国など、専門の方から助けがあるといいかと思う。

御所野遺跡のイベントでもそういった団体を呼んで、共同のイベントをやって盛り上げていきたい。

○松本雄士議員

いろいろ予算がつくと重荷になるというのは非常にリアルな意見かもしれない。継続性は大切だと思う。

今、福祉とアートのコラボや、いろいろな企業間のコラボなどでまた新しい価値が生まれている事例がある。この地域との連携も、外部との連携もまだまだ伸びしろがあると改めて思った。

そういったアイディアはまだまだあって、それに対して行政のすべきところ、場作りや仕組み作りもあると思っているので、引き続きいろんな意見をいただきたい。

○木村幸弘議員

意外と伝統工芸は身近にあって知らなかったり、そしてその価値が十分に理解されていなかったりということがある。我々も、地元の仕事のことをよく知らないで、外から聞こえたことによって、それを再発見したり、再認識したりする。生業として県外や海外の皆さんに、発信してものを売りながらも、一方でそこで得られた評価や、地元でこういうものが作られて、そしてこういう形で評価をされてもの作りとして成り立っているというところを地元フィードバックしながら、みんなの理解を高めたり、そこから若い人たちに興味関心を持ってもらったり、そういった評価のいろいろなやり取りを地元の人たちにしっかり伝えていくことがもう少し必要だと感じた。

花巻市にもいろいろな伝統工芸があるが、いわゆる和傘、花巻傘という伝統工芸をやっている方もいらっしゃる。和傘は結局、実用的なものではなく飾り物として、お土産であったり、海外の方であったりいろいろな方に評価されているという一面がある。

伝統工芸の実用的な部分と、それから観光資源であり、地域資源としての評価の仕方となるようなところを組み合わせながら進めるための考えなどがあれば伺いたい。

あと一点は御所野遺跡の関係で、私も何回か行ったが、ボランティアのお話がとても面白かった。

ボランティアたちとコミュニケーションを取りながら、すぐいろいろなものを発見してくるといったことがあったが、そういった部分での取り組み拡大やボランティアの確保状況を伺いたい。

〔回答：下嶽さん〕

地元の人に対してはある意味仕方がないと思う。どこにでもあるもので、特別なものではない。逆にそれが良さでもある。

私も一度岩手県を出た人間なので、改めて岩手県のもがここにあると言われると、感慨深い。

地元理解されないことは仕方がないと思いつつ、小さい頃に小久慈焼があったと覚えてもらって、それが次の種になれば嬉しいと思う。

〔回答：榎本さん〕

日本には日本民芸館が二つ、東京都と大阪府にある。日本のトップクラスの民芸、作品が展示されているが、そこに入るとまずあるのが、鳥越の竹細工と浄法寺の漆器である。やはり日本のクオリティとしてはトップクラスのものだと思っている。

だから岩手県のは、ホンモノというお話があったが、本当に本物の民芸がまだこの岩手県には存在しているし、まだ技術も残っている状況だと思う。

でも西日本に行くと、東北地方に行ったことがある人はほんの数%しかおらず、いつか行きたいという憧れの土地でもあるということはよくワークショップで聞いたりする。ぜひ遊びに来てくださいとお話すると、実際に来てくれたりする方もいらっしゃる。

そういった交流が生まれて、いいなと思っている。

観光もインバウンドを含めて本物志向になるだろうが、やはりまだ岩手県はインバウンド対策などが全然できていないと思う。都会に行くと複数の外国語表記も見ると、それに比べると全然できていないので、いろいろな問題や課題も生じると思うが、それを一つずつ誠実に対応していけば認めてくれる方もいらっしゃるの、そこは誇りを持って伝統文化を守っていくべきかと思う。

〔回答：中村さん〕

御所野遺跡のボランティアの方々は、今はいちのへ縄文里山クラブの30人ほどのメンバーがいる。

実は令和6年3月にボランティア連絡協議会は一度解散した。平成14年に団体ができて活動してきたが、高齢化が進み、ちょうど一戸町の直営に移行するタイミングで、若い世代が半分残る形になり、その後毎月講座をやって加入してもらい、現在は元々の人数くらいに増えたところ。

既に辞めた方については、広域振興局の方々にも参加いただいた御所野クリーンデイという清掃イベントのときにお声掛けして料理を作ってもらったり、歩いての活動は厳しくなっても、年に2～3回はお声掛けして協力していただき、顔を合わせて楽しんでもらうという機会は設けていこうと考えている。

◆ 感想

○五日市王議員

地元ということで質問は遠慮させていただいた。今日は本当にお忙しいところ参加いただき感謝する。

まず、地元の方になかなか使ってもらえないというお話もあり、やはり地元で使うということは後継者の問題にもつながっていくと思うし、市町村が中心になると思うが、工夫をしていかなければならないと思った。

柴田さんところで作ったものではないと思うが、私も竹製のカバンをエコバック代わりに使っていて高齢の方の目を引いたりするので、これからも積極的に使用して意識を啓発していく必要があると思う。

観光との関係だが、やっぱりこの地域にはホンモノ、本当に良いものがある。だから私は漆ミュージアムを県北地域にという話をしているが、日本民芸館をこの県北地域にもということも、今後の政策に当たるのかなと思った。

民芸ツーリズムというのか工芸ツーリズムというのか、そういったものの発想は、これからより大事になってくるのではないかと感じた。

本物を見せて、それを観光につなげていく。このことは力を入れて取り組んでいきたい課題だと思った。

○下嶽さん

このような会合は初めてで、こういった形になるのか全然分からないまま来た。

県北地域にしながら、日本を代表したいと思っているし、小久慈焼から岩手県を知ってもらおうと思った。

○堀内さん

ふだんなかなか議員の方々とかこういうお話をする機会はないので、その中で自分の思っていることを話すことができ、ためになったと思っている。今後とも地元の資源を生かして地域を盛り上げていければと思っているので皆様の御協力をお願いしたい。

○笹山さん

共通して言えるのは知ってもらうことが一番ということ。今日この会場にいる人たちは知ってしまったことで、広める責任と義務が発生した。私にも発生した。皆さんで広げていければ嬉しい。

○榎本さん

先ほど情報発信が大切だとお話したが、今は情報発信をしないと、もうこの世に存在しないという考え方もある。情報発信は大事であり、その一つの方法として、県北地域の民芸品をいくつかを集めたパンフレットを作っているのを御紹介する。

本当にどれも素晴らしいものなので、またこれを眺めながら、県北地域の良さを再発見していただけたら嬉しい。

○中村さん

今回参加させていただいて、文化芸術や伝統産業が観光に結びつくということをひしひしと感じた。今後とも県に助けをいただき御所野遺跡、一戸町さらには県北地域を盛り上げるために一生懸命取り組みたい。

○柴田さん

今日はとても緊張して、何を話していたか分からないが、皆さんの取り組みを聞かせていただいて勉強になった。

○高橋こうすけ座長

本当に現場のリアルの声、皆様の様々な立場から意見を聞かせていただいた。

私自身も大変多くの気づきがあったと思っており、皆様から頂戴した意見をしっかりと今後の政策や取り組みの参考にさせていただきたいと思う。

本日頂戴した御意見、御提言については、県議会の全議員が情報共有し、今後の議会活動に生かしてまいりたい。これからも県議会に対する御意見や御提言があれば、地元の県議会議員、あるいは県議会事務局までお寄せいただきたい。

お忙しいところ御参加いただき感謝申し上げ、意見交換を終了させていただく。